

第Ⅲ群 座長のまとめ

名 市 大 耳鼻咽喉科
馬 場 駿 吉

演題8はアレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、鼻茸などの鼻過敏症の手術的治療に際し、その治療効果を客観的に評価することが必要である。その一つの方法として演者らは副交感神経系を刺激するメサコリン剤の各種濃度のものをエアロゾルにて1分毎に連続的に鼻内に噴霧して鼻腔通気度の変化を測定し、その用量依存性を表す曲線を描記する方法を考案した。そして術前、術後の曲線を対比し、術後、過敏性の低下した実際例を示し、本法の有用性を報告したものである。エアロゾルを検査に応用することは従来からも気管支喘息の誘発反応をみる検査でも行われているが、鼻科領域でも実際にこのような検査が応用し得ることを示した研究として評価できる。

演題9は、保険診療上にネブライザー療法がどのように認知され、現在に至っているかを厚生省大臣官房統計調査情報部の資料に基づき、歴史的に展望、回顧したものである。最近では、耳鼻咽喉科の保険診療においても大きな比重を占めるようになってきている現状も明らかにされ、ネブライザー療法の現在と今後を考える上で、大きな示唆を与える内容であった。

演題10は、日本耳鼻咽喉科学会社会医療部保険医療委員会によって、ネブライザー療法が耳鼻咽喉科一般臨床で、どのように使用されているかについてのアンケート調査を行ったが、そのまとめが報告されたものである。この内容からもわかるように、上気道の炎症性疾患には病院、診療所とも繁用される治療法として耳鼻咽喉科の日常診療に定着していることがうかがわれ、また、耳鼻咽喉科においては、適切に使用されていることも判明した。ただし、使用医薬品の適応についての問題が今後に残されており、現在進行中の臨床試験結果を踏まえた早期解決が望まれるところである。